

『寄生獣』における胸の穴の役割

細川 凌雅

『寄生獣』は1988年から1995年に連載されていた漫画だが、その内容は未だに色褪せないものであり、現在でも多くのファンがいる作品である。私もその一人であり作品を読み返すうちに胸の穴に関する描写が多く存在することに気が付いた。漫画を題材とした研究は近年盛んに行われているが意味論的分析は少なく、『寄生獣』に関する論文はエッセイや同作者の他作品との比較などを除くと5つしかない。そこでポール・グライスの協調の原理を用いて文学作品を分析した先行研究を参考に、本研究では『寄生獣』の作品内における胸の穴の役割についてポール・グライスの協調の原理を用いて明らかにし、『寄生獣』をより深く理解するための意味論的分析を行うことを目的とする。

ポール・グライスによると会話には協調の原理が必要であり、4つのカテゴリーに分けられた会話の格率がある。また会話の格率が満たされない場合に会話の含意が生じうる。本研究では、胸の穴に関連する箇所として「穴」という単語が登場する会話、胸の穴のカットが登場している際に行われている会話、胸の穴を連想するカットが登場している際に行われている会話を分析対象とした。そして、先行研究にならい協調の原理を用いることで胸の穴に関連する作中での会話を現実の会話と想定し分析を行い、胸の穴に関連する描写があるものはそれを発話状況として分析を行った。その後漫画作品としての会話を第三者視点で分析した。

研究の結果、多くの会話は会話の格率が満たされていなかったが会話の含意や第三者視点からの分析によって穴には大きく二つの役割があることが分かった。一つは肉体的な表現としての寄生生物である。胸の穴をミギーによって修復されたことで新一は肉体的に強くなり、寄生生物へと近づいた。それが胸の穴という単語を用いた会話や胸の穴のカットを入れた会話として描かれることによって表現されていることが分かった。もう一つは精神的な変容としての胸の穴である。作中では新一の胸の穴は心の傷であるという意味での使い方が見受けられた。一方で会話のない場面や胸の穴を服の上から押えるという行為、会話で破られた格率の読者による補足が新一の精神的な変容を暗示しているとわかった。またこの精神的な胸の穴はパラサイト田宮が母親としてもう一度会うことによって精神的な穴は塞がれ、冒頭で母親に物理的な胸の穴を開けられたシーンとの対比となり、物語の深みを増す効果もあった。

以上のように胸の穴には寄生生物と交わった存在である新一の象徴であり、寄生生物と交わった際にうけた精神的トラウマの象徴として物語上での重要な要素となっていると分かった。しかし本研究では会話以外の箇所を詳細に分析することはしなかった。それは今後の課題である。

(指導教員 横山幹子)